

平成26年度教師海外研修(ラオス) 研修報告書

学校名	岐阜県立下呂特別支援学校	氏名	辻 真美
-----	--------------	----	------

1. 現地研修に対する各自の目的 とその達成度

(特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

国際理解教育に関する知識を深めることと、参加型学習に関するスキルや現地での経験を、教育実践につなげたいというのが研修の目的であった。特別支援学校に勤務しており、これまでの自分の実践を振り返ると、どの授業も異なる文化を「知る、気付く」に留まってしまい、開発教育が目指す「考え・行動する」まで達することができなかった。それは、何に気付いて考え、生徒たちにどう行動してほしいのかという明確な目的とそれを達成する方法を知らなかったからだと研修を通じて気付いた。今回はラオスでの文化、医療、環境、教育等様々な国際協力の事業の現場を見ることができた。その国の良いところに肯定的に出会えること、課題に対してどうしたらよいかみんなでアイデアを出すこと、自分達との関連性や生活の中にある課題について考え、行動すべきことがあることに気づき、そしてその行動を支えていくのが今後私のやるべきことなのだと思う。研修で感じたワクワクする気持ちや学び合う楽しさを生徒達と共有できることが楽しみである。

2. 訪問国から学んだこと (気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど)

(1) 柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

東南アジアの最貧国であるラオス。この言葉が示す本当の意味を、ラオスを訪れるまで理解できていなかった。様々なデータや資料から、確かに経済的には脆弱で、他国からの支援がなければ安心した生活が確保されないという厳しい現状がある。しかし、一旦ラオスに足を踏み入れれば、「貧困」から連想されるような否定的な言葉を思い浮かべることは少なかった。少数民族をはじめ、仏教が根付いた伝統的な暮らし、食も自然も豊富で、人々は非常に落ち着いた生活を送っており、ラオスタイムと呼ばれるゆっくりとした時間に身を置けば、何だか子ども時代の懐かしささえ感じた。「貧困」と反対の意味をもつ「裕福」。大切なものは「家族」と多くの人が語り、穏やかな微笑みを浮かべる姿からは心の裕福さがにじみ出ている。これは、現地に行かなければ感じることはできなかったであろう。

(2) 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

JICA 事務所のオリエンテーションの中で、日本とラオスは1955年よりつながりがあり、最初に国際協力をした国であるということを知った。恥ずかしながら、研修を受ける前までラオスと日本とのつながりについて全然知らなかったのだが、ラオスのために働くたくさんの日本人に出会うことができた。異なる文化であっても、その中で一緒に活動することで、受け入れられる日本人の価値観や良さがあるということ、訪問先の事業や青年海外協力隊の方々の活躍から理解することができた。同じアジア圏で、遠慮がちで、感情をあまり表に出さないラオス人を見ると、無理やり共通点を探さずとも、日本人と似ているなあと自然と思うことが何度もあった。子どもセンターで、我々の集団の横を、腰を低くして「ちょっと失礼します」の姿勢で通り過ぎ

た子どもを見た時には思わず微笑んでしまった。

(3) 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

ラオスパイロットプログラム環境コンポーネント LPPE で、ゴミ処理に関する事業の現場を見せていただいた。ラオスでは、ゴミを分別する習慣がまだ浸透しておらず、サヤブリ県病院で働く協力隊員の看護師も課題の1つに挙げている。ルアンプラバン県では、LPPE の取組でゴミ処理場が整備され、自然の循環機能を利用した処理方法が導入されていた。シンプルな仕組みだがこれこそがラオスにおける持続可能な開発なのだった。日本でも5Rの考え方が広まり、環境への意識は高まっているものの、ゴミの排出量は世界一。これは大問題である。日本もラオスも、おそらくどの国においてもゴミや廃棄物に関しては共通して抱えている問題である。日本には物が溢れていて、ゴミ箱があつという間にいっぱいになってしまっているのを見ると、ゴミ処理以前に、ゴミを出さない生活を心掛けるべきであると強く思う。これは、個人でできる立派な持続可能な地球への貢献である。

3. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

「良い!と思ったところ」は何といても、支援国からの要請に対して、国の経済状況や不足している部分のみに着目するだけでなく、持続可能な開発を目指した視点で支援を行っているところである。どの事業もラオス人の国民性や文化をよく理解しており、日本人のもつ思いやりの心や人の立場に立って考えることのできる強みが活かされていると感じた。

「今後あるといいなと思う視点」は、国際協力事業やその成果を国民全体へ積極的にアピールすることである。以前より国際理解や国際協力に興味があった私自身も、事業内容について、研修を受けるまでは詳細について知らなかった。積極的に情報収集をする人や何かのきっかけで国際協力に関わる機会があった人のみが理解を深めているのが現状ではないかなと思う。メディアや教育の力を利用して、是非広めてほしい。

4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」

① JICAラオス事務所（事業概要・オリエンテーション）

ラオスは国土が日本の本州とほぼ同じであり、人口は約651万人。後で調べてみると愛知県の人口よりも少ない数字であった。その中で、自営業や家族労働者が全体の86%を占めている。また、言葉や習慣の異なる49の山岳民族が暮らし、国としてデータで把握しきれない現状があるというのがラオスならではの感じた。経済においては、貿易収支赤字が常態化しており、その後の研修場所で何度もキーワードで出てきた「資金不足」という言葉が、このデータを裏付けるものとなった。

日本とラオスとのつながりにおいては、日本が最初に国際協力に関わったのがラオスであり、1955年から相互の関係が続いているという話が印象的であった。支援内容は主に経済、農業、保健医療、教育の4分野である。日本が目指すバランスのとれた経済発展、そして、持続可能な開発をそれぞれの現場でどのように捉えられ、支援が行われているのか、訪問地への期待が高まった。(辻 真美)

⑤ ラオスパイロットプログラム環境コンポーネント LPPE

プロジェクトの概要を伺う中で「これが持続可能な開発だ！」と大きく頷いたことがあった。それは、「日本が撤退してもラオスがやっていけることが目的である」ということであった。経済的困難さから、諸外国から資金、物資、技術支援を受けており、ラオスもそれを望んでいる。しかし、ラオスの実情に合わせた支援を行わなければ、一時的なものに過ぎず、最悪、新たな課題を残してしまうことにもなりかねない。例えば、医療用廃棄物の処理に関して、他の国から立派で利便性のある処理装置が設置されたが、国内でメンテナンスをするための資金も技術もなく、結局使いこなせぬままになってしまっている。そこで本プロジェクトにおいては、持続可能という視点で分析し、日本製ではなく隣国のベトナム製の装置を導入することで、実情に合った持続可能な支援を行ったという事例を伺った。なるほど、自国の考え方を押し付けるだけでは、支援する国に定着することは難しく、これこそが国際協力の意義なのだなと感じた。(辻 真美)

⑥ 王宮博物館、ワット・マイ、ワット・シェントン、プーシーの丘など

(ルアンプラバンの歴史・文化施設)

ルアンプラバンは、街全体が世界遺産ということもあり、メイン通りはオシャレなカフェや雑貨屋が並び、女心をくすぐられた。欧米人の観光客が目立ち、のんびりとバカンスを楽しんでいる姿を目にし、小さな街ながらも世界から注目されていることを感じた。

金箔がふんだんに施された神々しい寺院が点在し、どこからともなく鐘の音が響き、お坊さんが袈裟を纏って街を歩いている姿を見ると、仏教が暮らしに息づいていると感じずにはいられなかった。ワット・シェントンでは、1960年に行われたシーサワンウォン王の葬儀で使われた霊柩車が収められており、驚くべきことに、遺体が立った状態で収められていたとのこと。「王様は亡くなった後も威厳を示しているのだ」とラオスの歴史に思いを馳せた瞬間だった。(辻 真美)

⑭ メコン川クルーズ及びパクウー洞窟

8月は雨季真っ只中であり、メコン川を流れる水は茶色く濁っていた。「クルーズ」と呼ぶに、個人的にはふさわしいと思う、車のシートを利用し、かつ可動式という再利用型座席に腰を下ろし、ゆったりとした流れを楽しみながら上流を目指した。メコン川には、豊富な魚が生息し、ラオスの食卓を彩っている。また、生活水としても活用されており、川沿いに暮らしている人々が洗濯をしていたり、お坊さんが水浴びをしていたり、象も川縁でリラックスしていた。しばらく景色を楽しんでいるとパクウー洞窟が見えてくる。狭い階段を上がり洞窟に入ると、所狭しと仏像が納められていた。村の人々がこの場所に仏像を持ってきてお祈りをするという。古い仏像もあれば新しいものもあり、今もなお、仏教と生活が一体となっているのだと感じた。(辻 真美)

⑰ ビエンチャンの市場 (8/12 マーケット) 、歴史施設 (8/4 凱旋門、8/12 タートルアン) など

ビエンチャンは首都であり、人も物も車もお店も全てが集まってきているといった印象だった。市場には

小売店が立ち並び、家電、日用品、衣類、本、食品と何でもあった。市内に巨大スーパーやショッピングモールがなくても、人々の生活の基盤は市場にありということが分かった。今後ラオスが発展していくにつれて、かつて日本が進んできたような道を辿るとしたら、今は活気溢れる市場も段々と小規模になってしまうのかなと思った。市内では、ラオスの歴史を物語る凱旋門やタートルアンを見学した。凱旋門を頂上まで登ると、市内を一望することができ、ラオスの発展を期待させる街の力強さを感じることができた。しかし、美しい外観をもちながらも内装は未完成な部分もあるという話で、なんともラオスらしさを感じることができた。日本では建設途中のままということはあるまいだろう。(辻 真美)

5. 印象に残る写真2点 とその解説

●写真1…ファイル名 [SKB_0055]

◇キャプション：HAND MADE

◇解説文：

ホアイホン職業訓練センター。美しい民族衣装のシンを始め、織物が有名なラオス。あらゆる現場で機械化が進む中、全てがHAND MADEの世界でした。



●写真2…ファイル名 [YBE_1620]

◇キャプション：

「ヌン (1)、ソン (2)、サン (3)、それっ！」

◇解説文：

日本文化の交流タイム。言葉の壁を超え、どの教員も本領発揮！和太鼓と一緒にやり、研修中で最も笑顔とエネルギーを放出した時間でした。もっと時間をもらって授業をしたくなってしまうのが、教員の性です。



6. 来年度参加する先生へのアドバイス (持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など)

持ち物に関しては、事前にJICAよりリストいただけるので、そちらを参考に。行きには訪問先への菓子折り、帰りには教材やおみやげをスーツケースに入れることになるので、持ち物は少ないのに限ります。服に関しては、連泊の時に洗濯もできるので、日数の半分程度でも大丈夫かなと思います。宿泊場所への不安がありましたが、ガイドブックの中でも中級程度のホテル（その国の物価にしたら高級？）で、安全や衛生面への心配はそれほどありませんでした。10日間の研修、そして団体行動（基本的に自由時間なし）ですので、ホテルの時間や移動中など、自分の体と相談しながらしっかり休息をとることも大切です。研修内容に関しては、「マナビノオト」という事前研修も含めた全ての情報がつまった資料が配布されます。また、同行スタッフが研修時間をしっかり確保してくれるので、学ぶ視点を見失うことなく、研修を深めることができました。

7. その他全般を通じての感想・意見など

教員生活を通して、様々な研修を受けてきましたが、これほど充実した研修に参加できたのは初めてでした。子供たちに変化を強いるのが教員ですが、なかなか自分を変えることができないのが教員でもあります。事前事後研修も含めて、参加型でお互いに学びあう姿勢や「人の頭を借りて考える」という言葉に表されているように、全ての人の意見が尊重されている環境は、なかなか現場では味わうことができません。知り、気付き、考える機会をたくさんいただいたので、あとは自分自身が行動に移していきたいと思います。

以上